

# 北京の下町 胡同探訪

松尾美紗

私たちの初めての海外旅行は、あわただしく幕を開けたのだった。

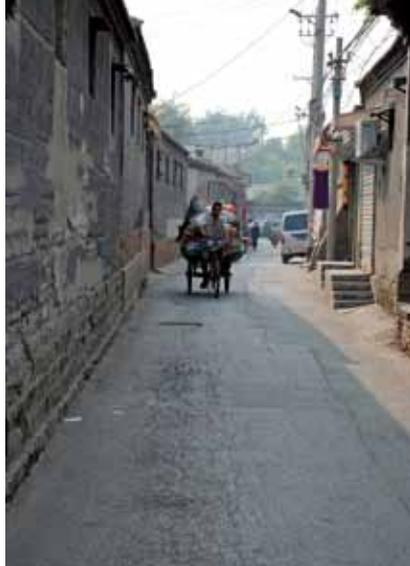
## 北京は大会だった

北京の町は、二週間前にオリンピックが終わり、ちょうどパラリンピックが催されていたので、歓迎ムードにあふれてはいるものの、ピリツとした警戒モードも目についた。

私たちは、空港で現地ガイドの陳さんの出迎えを受け、小型バスで北京市内のホテルへ向かった。その移動中すでに、私の中の「中国」像はガラガラと崩れていった。恥ずかしながら私は、

二〇〇八年九月、私たち総勢十二名の学生は、瀬古・鹿野両先生に引率されて、中国の北京を五日間訪れた。「アジア文化演習」という授業の一環である。

初日は、米子空港からアジアナ航空で韓国の仁川空港へ行き、ソウルの明洞で夕食をとり、ソウル郊外で一泊した。翌日早朝、モーニングコールがかからないというハプニングを乗り越えて、なんとかホテルを出発。無事アジアナ航空機に乗り込んで仁川を飛び立ち、午前一〇時前、北京国際空港に到着した。こうして



■鼓楼周辺の胡同。

「赤色と自転車と北京ダックにパンダ」というステレオタイプの中の中国イメージしか持っていないかったのだ。それなのに目の前に広がっているのは、広大な市街地、林立する真新しい高層ビル、何車線もある立派な道路、横を走り抜けていく高級車。松江なんて比べ物にならないくらい

い、北京は超大会だった。

北京市内には、鼻にツーンとくる刺激臭が漂っていた。陳さんは、それが排気ガスの臭いだと教えてくれた。排気ガスは巨大な都市をスッポリと包んでいるようで、天候は晴れなのに空は薄い灰色だった。それでも陳さんによると、「今はオリンピック中だからまだ良い方」らしい。

しかし、この臭いも空も、なんと次の日には気にならなくなっていた。鼻や目が慣れてしまい、違和感を感じ取れなくなってしまうのだ。私たちが、案外



どこに行っても順応できるかも。

## 胡同とは

北京では、近代的な大会としての顔だけでなく、伝統的な下町としての顔にも出会うことができた。

北京の下町は、「胡同」と呼ばれている。北京の市街地には、元や明の時代から、それを取り囲むようにして城壁が築かれていた。胡同とは、これらの城壁の内部に発達した細い路地のことである。一つひとつの胡同には、豆腐池胡同や王佐胡同などのように、それぞれ個別の名前が付けられている。

胡同の路地は車一台がやっと通れるくらい狭いので、その両側にはレンガ造りの一階建ての家々が連なっている。その家々の灰色の外壁が衝立のように立ち並



■瑤璃散東街の輪タク。

■ (上段) 鶏肉の量り売り。(下段) 小吃の店。



んで、内部は見えない。日本でよく見られる、生け垣で囲った庭は、まったく見あたらない。

灰色の壁面のところどころに門がある。その内部には中庭があり、その東西南北をグルッと取り囲むように住居が建てられている。これが、「四合院」と呼ばれる、胡同の伝統的な建築様式である。現在では、多くの四合院は取り壊され、その敷地は細分されて、複数の人びとが居住していることが多い。

私たちは、いくつかの胡同を訪ねてみた。まずは、地下鉄和平門駅の南約五百メートルにある琉璃廠の周辺である。琉璃廠は、硯、墨などの文房四宝で名高いが、その東に毛細血管のように胡同が広がっている。次に、地下鉄鼓楼大街駅のすぐ南に残っている胡同である。いずれの地域も、北京の市井の人びとの暮らしが色濃く残っている場所である。

### 暮らしを支える胡同の店

いくつかの胡同に隣接して、たいてい少し広い道がある。胡同より少し広

いその道は、「街」と呼ばれる。そこには、肉屋や八百屋をはじめとしてさまざまな店が並んでいた。私たちは、胡同と街がセットになって、人びとの生活が成り立っているという印象を受けた。したがってここでは、細い路地としての胡同に街も加えた「下町」として、「胡同」という言葉を用いることにする。

肉屋では、肉の大きな塊や、一羽丸ごと鶏を売っていた。肉の傍には秤が置いてあった。八百屋では、チンゲン菜などの野菜やブドウやリンゴなどの果物が売られていた。店先には、ブドウなどが箱に入ったままで売られており、そこには値段は書かれていなかった。酒屋では、啤酒(ビール)や白酒(蒸留酒)、ミネラルウォーターやジュース類などのほかに、タバコや鶏蛋(卵)も売っていた。胡同の家々には、台所をもたない家も多いそう。そんな人びとがよく通うの



■ (上段) 練炭を運ぶ三輪車。(中段) トイレの外観。(下段) 男性用トイレ。

であろうか、胡同には「小吃」とか「餐館」という飲食店も目についた。小吃とは、麺類や包子(ギョウザ)や肉まんなどのこと、饅頭などの軽食のことである。「油条」と呼ばれる揚げパンは、北京の朝食としてポピュラーである。

食べ物以外にも、洗衣店(洗濯屋)、理髪店、美容院、そして自転車を修理する店などがあつた。

また、「麻雀」という文字が書いてある娯楽店もあつたが、四〜五人の男性が木陰に集まって、将棋らしき遊びをしている場面もよく見かけた。

琉璃廠東街の東端から北へ向かう延寿街で、こんな場面に出会った。その店の前を最初に通ったとき、店員は店の中で寝ていた。商品に囲まれて寝ている姿を、写真に撮らせてもらった。そして帰りにもう一度その店を見てみると、店の中に



■ 延寿街の粉屋さん。

店員はおらず、彼が寝ていたところには別の商品がおいてあつた。店員は働いているかと思いきや、彼は道の反対側で椅子に座って昼寝をしていた。胡同には、市街地とは隔絶されたゆつくりとした時間が流れていた。

### トイレ考

ガイドの陳さんによると、胡同にはトイレをもたない家も多いそうだ。だからそれぞれの胡同には、路地に面して共同のトイレが備えてある。こんなところから私たちは、ひとつの胡同は共同アパー



トカ長屋のようなものであるという印象をもった。

このトイレには、私たちは大きなカルチュアショックを受けた。表は、男子用（男廁）と女子用（女廁）に分かれている。しかし、男子用も女子用も、中には大の方の便器がいくつか並んでいて、日本のように一つずつが壁や戸で仕切られていないのだ。中国の人は平気で用を足



すのだが、日本人にはかなりハードルが高かった。結局、胡同の共同トイレは一度も使うことなく、日本に帰ってきてしまった。

ちなみに、市街地の公衆トイレは扉付きの個室になっていた。しかし、ここにもカルチュアショックの種が隠れていた。なんと、扉を開けると、日本風の便器が扉側を向いていて、水を流すためのレバーは便器の後ろにあったのだ。日本だと、便器は奥に向いていて、レバーはその先にある。私たちにはこちらの方が当たり前になっているけれど、中国式に出会うと、日本式がけつして当たり前ではないことに気づかされた。

文化とは、このように、ある人びとにとってある一つのやり方を当たり前のものにしてしまう。文化、恐るべし。



■（上段）越府街の木陰で将棋中。（下段）八百屋の店先。



■（上段）延寿街のお肉屋さん。金鑫は「きんしん」と読む。（下段）延寿街で出会った看板。

### 面白貼り紙&看板

胡同には、面白い看板や貼り紙が目についた。一番多く目に留まったのは、「福」の字が逆さになっている「倒福」の貼り紙だった。これを門に貼ると「福が到る」（中国語で「倒」と「到」は同じ音）と信じられていて、たいいていの家の門に貼ってあった。

延寿街では、「此处禁止倒大便」と書かれた看板が張り出してあった。みんな意味を推測しあって、結局、「ここで大便するなということなんじゃないの」という結論に達したが、後で意味を調べると、「倒」には「容器から」あける」という意味があり、「おまるから大便を捨てるな」ということらしいと判明した。

### 自転車大活躍

胡同には「人のいるところ常に自転車あり」という感じで、自転車がいたるところにあった。ナンバーの付いている電動自転車も人気があり、よく走っていた。また、ユニークな自転車も数多くあつ



■バイクタクシー。

た。例えば、三輪車の後ろに荷物を載せるような箱を取り付けた自転車。空き缶や段ボールなどを山盛りに積んで走る、廃品回収のおじさんの姿が目焼き付いている。

そして、三輪車の荷台に座席を設けて、タクシーとして使っている「輪タク」。地下鉄鼓楼大街駅から南へ約一キロ、前海という湖の周辺の観光地化された胡同を、後ろに客を二人乗せた輪タクが、何台も連なって疾走していた。

道幅の狭い胡同では、自動車よりも自転車の方が、人びとから圧倒的な支持を得ているのだった。

雄大な万里の長城や、壮麗な故宮博物院  
（次頁最下段へ続く）

た。例えば、三輪車の後ろに荷物を載せるような箱を取り付けた自転車。空き缶や段ボールなどを山盛りに積んで走る、廃品回収のおじさんの姿が目焼き付いている。

そして、三輪車の荷台に座席を設けて、タクシーとして使っている「輪タク」。地下鉄鼓楼大街駅から南へ約一キロ、前海という湖の周辺の観光地化された胡同を、後ろに客を二人乗せた輪タクが、何台も連なって疾走していた。

道幅の狭い胡同では、自動車よりも自転車の方が、人びとから圧倒的な支持を得ているのだった。

# スタンプ

## ——旅の思い出——

小倉佳代子



通常、海外旅行の行き帰りにはパスポートに出入国のスタンプを押してもらう。何も問題がなければそのままスタンプを押してパスポートを返してもらえただが、このまるで記念スタンプのようなスタンプが押されているパスポートを日本の審査官に差し出すと、大抵の人がそのページを手を止め、こちらの顔を見る。中には訝しげに「これは……?」

と尋ねる人もいる。

二〇〇三年の夏。カナダからアメリカまで旅をした。と言ってもカナダの西端にあるユーコン準州の州都、ホワイトホースからアラスカの東端にある港町、スキヤグウェイまでの、車で片道四時間ほどの小さな旅だ。

ホワイトホースでは夏でも半袖シャツ一枚では涼しすぎる。夏でも運が良ければオーロラが見えるほど極地に近い町である。

アラスカのスキヤグウェイは、ゴールドラッシュのときにできた港町で、今は古い町並みが残る観光地になっている。夏でも山は雪で真っ白で、氷河が青白く見える。豪華客船の寄港する日は多くの観光客で賑わう町だ。

国境を越えるドライブをしようと思いついたのは、ホワイトホースからアラスカまでは直線距離にして二〇〇マイルくらい、という話を聞いたからだ。国と国の境目を自分の足（というか車）で越えるなんていう経験は、島国日本に住んでいる限りまずありえない。

さっそくレンタカーを借り、西へ向かう。針葉樹に囲まれた道を一路アラスカへ。町を出るとすれ違う車も少なく、一度だけ、道を渡るグリズリーという灰色がかかった熊を見かけた。

しばらく走ると道をふさぐ遮断機のようなものが現れる。それに併設された建物が、アメリカのパスポートコントロールだ。

車を停めて建物の中にいる管理官にパスポートを渡しに行くと、アラスカでの滞在期間など、簡単な質問の後にスタンプを押してくれた。そしてもう一つ追加されたスタンプが……。それはスキヤグウェイという町の名前と機関車の絵柄のスタンプだった。

が、まるで観光地の記念スタンプのようなそのスタンプは、なんと帰りのカナダ再入国の際にも押されたのだ。今度はクマのモチーフとユーコンの名前入りのスタンプを二つも。

そしてその珍しい、まるで記念スタンプのような入国スタンプは、ほぼ毎回とっていいほど入国審査官の手を止めさせる。そしてその度に「カナダからアラスカまで陸路で行った際に……」と説明することになるのだ。 (おぐら・かよこ／総合文化学科非常勤講師)



(前頁から続く)

院も、どちらも一見の価値のある素晴らしい世界文化遺産であった。しかし、やはりなんと言っても、それほど見栄えのない、どちらかというとうらぶれた、胡同での体験の方が断然おもしろかった。中国の人びとの生活と少しでも触れ合えたことが、何よりも心に残った。中国は、中国に住む人びとによって作られている。こんな当たり前の認識を得たことが、自分の一番の財産となった。

また、日本という国の中では通用する基準や価値観が、ほかの国では必ずしも通用しないということも、体験してはじめて知ることができた。つくづく、自分は狭い世界で生きていたのだと、感じることもできた。日本にいるだけでは気がつくことができない、そんな発見がたくさんあった、いい異文化演習になった。 (まつお・みさ／文化資源学系二年生)



■天安門広場にて。

# インドネシアの断食月

塩谷もも

## イスラム暦と断食月

「今、こちらはラマダーン（断食月）。私も五日間、断食に『参加』しました。（中略）今朝三時の食事が胃痛で出来なかったのでギブアップ。断食をやめました」

これは二〇〇一年、私がインドネシアから祖父に送った誕生日カードに書いた文章である。このカードにある断食月について、イスラム教徒が国民の九割近くを占める国、インドネシアのジャワ島を中心に紹介していく。

イスラム教徒の断食は一月月という話をすると、断食を一ヶ月もして生きていられるの？と返されることが多い。もち

ろん、一ヶ月間まったく飲まず食わずではなく、イスラム教徒の断食は昼間のうちなので、日没後の飲食は自由である。日没の時間は、地域、季節によって異なり、日によっても多少変動する。つまり、世界中のイスラム教徒が同じ時期に断食を行なうが、断食をする時間帯は地域ごとに違っている。

断食月は、イスラム暦<sup>①</sup>（月の満ち欠けに基づく太陰暦）では九月にあたり、太陽暦にあてはめると、毎年十一月ほど前へずれていくことになる。例えば、二〇〇八年の断食月は太陽暦では九月月上旬から十月月上旬だったが、二〇〇九年の断食月は太陽暦では八月下旬から九月下旬にあたる。

十年ほど前、日本に赴任していたインドネシア語の教師は十二月に断食月を迎え、日本での断食は日が短いので楽だと言った。一方、二〇〇八年に日本に赴任したインドネシア語の教師は九月に断食月を迎え、日が長い六月が断食月でなくて良かったと話していた。また、白夜のある地域での断食については、特別な断



■断食月中にモスクで行なわれた塗り絵コンテストの一場面。

食スケジュールが採用されるとのことである。

（１）断食月＝ラマダーン。イスラム教徒が断食、齋戒を課される月。日本で広く使われている断食月という語を、本稿ではラマダーンと同じ意味で用いる。

（２）イスラム暦＝ヒジュラ暦。預言者ムハンマドがメッカからメディナに聖遷（ヒジュラ）をした西暦六二二年が元年の太陰暦。一ヶ月が二十九日～三十日、一年が三五四～三五五日で構成される。

## 断食の方法

断食月中も人々は普段と同じように日常を過ごしている。いつもよりも早帰りになるが子どもは学校へ通い、大人は職場へと向かう。断食が始まるのは午前三時半頃で、その前にとる断食開始前の食事はサウールと呼ばれる。飲食店もこの時間にあわせて開店し、日中は閉店する。



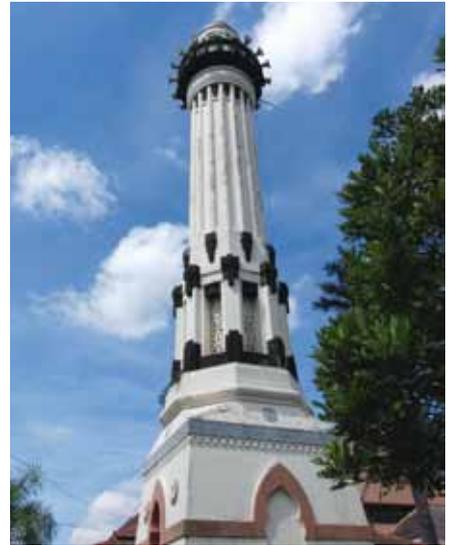
■（上）ジャワでお世話になった家族と親戚。（下）モスクの内部。偶像崇拜を禁じているため、聖像は一切ない。





■モスクでの集団礼拝を終えた子どもたち。

断食月中は「サウール！」と大声で叫びながら、近所の人を起こして回る人がいる。サウールが済むと、日没まで一切の飲食を絶つ。一日の断食明けは、モスクからのアザーン（礼拝を呼びかける声）、ラジオ放送等を通じて知らされる。同じインドネシア内であっても、地域ごとに日没の間は異なり、また少しづつ時間がずれるため、断食月が近づくと一ヶ月分の断食表が商店等で無料配布され、これを見ながら食事の準備などをす。例えば、二〇〇一年に入手した断食表（ジャワ島ソロ市周辺用）では、断食の初日は、断食開始時刻三時三十七分、断食終了時刻十七時四十分、断食の最終



■モスクから礼拝を呼びかけるための塔。上部にスピーカーが付いているのが見える。

日は、断食開始時刻三時四十二分、断食終了時刻十七時五十四分となっている。断食が終わる時間が近づくと、砂糖がたっぷり入った紅茶、菓子、ナツメヤシのドライフルーツ、揚げ物等を準備する。ココナツミルクでバナナ等の果物を煮込んだコラツを準備することも多く、こうしたもので胃をならした後に食事をすす。食事の準備も夕方になされるが、断食中は味見ができないため、味付けが心配だと話す女性もいる。断食月中、ジャワの下宿先では、断食をしていない私が味見役を頼まれることもあった。信仰に基づいて行なう行為ならば、何時間も断食をしなくても、空腹を感じないのだろうか？ インドネシア人のイスラム教徒に質問をしてみたことがあったが、「とてもお腹がすく」「のどが渇くのがつらい」と率直な答えが返ってきたのが印象的だった。イスラム教徒が断食をする理由の一つには、豊かな人も貧しい



■（上段）断食月明けの集団礼拝。（下段）断食月明けの集団礼拝後の宗教講話会。

人と同じ状態を体験するためというものがあるが、この点からは、空腹を覚えなければ断食の意味が薄れるのかもしれない。

### 断食に挑戦！

観察や話を聞くことに加え、自分で経験してみることは、フィールドワークをする上で重要なことである。二〇〇一年にインドネシアで初めて断食月を迎えることになった。せっかくの機会なので、断食の初日は下宿先の家族と一緒に断食を経験してみようと思いついた。第一関門は早起きをすることだったが、それは成功した。夜中だが、テレビは断食用の特別番組が組まれ、チーム対抗のにぎやかなクイズ番組が放映されており、その声を聞きながら食事をした。まったく食欲はなく、目が覚めてすぐにご飯と揚げ物の食事をとるのはつらかったが、

何とか食べ終えた。下宿先の家族にならって、断食開始時刻直前に水を大量に飲み、その後部屋に戻ってもう一度睡眠をとる。

断食にはじめて挑戦した日は、下宿先の家で一日ゆったりと過ごした。お茶を飲みたくなって立ち上がろうとしては、断食中だと思い直し、何とか昼頃まで飲食をせずに我慢した。イスラム教徒でも、子どもなど断食初心者はお昼までの半日の断食から始め、徐々に体を慣らしていく、日没までの断食が出来るようになるという。私も断食初心者であるため、屋近くに下宿先の家族が食事をしてはとすめてくれたが、もう少し続けてみることにした。インドネシアは赤道直下の国で、日中の気温は三〇度近く、空腹よりものどの渴きが伝わった。午後になると、本を読んでも同じところを何度

も読んでしまうなど、集中力が続かなくなる。断食に慣れていくイスラム教徒でも、断食開始から数日間、体が慣れるまでの期間はつらいそうである。断食明けの時刻が近づくと、飲み物を準備する台所と食堂の周辺に家族が集まってくる。ラジオで断食明けのアナウンスが流れるのを



■（上段）断食月中の晩に行なわれる集団礼拝。前方は男性、後方は女性と礼拝の空間が分かれている。（下段）モスクで礼拝をする男性。礼拝着を身につける女性とは異なり、服装は多様。

待つ、皆で砂糖入りの紅茶を口にしました。断食後に口にした紅茶のおいしさと一つのことをやりぬいたという達成感が引き金となり、また自分がどのくらい耐えられるかを試してみたくなり、断食を続けた。結果は、はじめのカードに書かれていたように、私の場合は五日間が限界だった。翌年の断食月もインドネシアに滞在していたが、その年は一日も断食をすることなく過ごした。

### 断食をめぐる規定と実際

インドネシアで、ベールをかぶったイスラム教徒の女性が、断食月の日中に堂々と食事をしていたという話を日本人の知人から聞いたことがあるが、それは生理期間中、妊娠中、あるいは授乳期間中の女性だった可能性がある。このような期間にあたる女性、高齢者や病人、旅行中の人、小さな子どもなどは断食を免

除される。断食をできない代わりに、経済的に恵まれない人に食べ物を喜捨する方法をとることもある。例えば、私の下宿先の「姉」は授乳中で断食をしていなかったが、断食月中に一度、孤児院に鶏肉料理とご飯がセットになった箱詰め料理を人数分届けた。

また、免除規定にあてはまらない人であっても、断食をしないイスラム教徒は存在する。インドネシアで断食月中に訪問したイスラム教徒の家庭で、飲食をしている場面を目にしたことは数回あり、誘われて昼食を一緒にとったこともある。断食は昔からしていないと公言するイスラム教徒もいた。

その一方で、非常に厳格に断食を守る人もおり、前年の断食月に何かの理由で数日間断食ができなかったという男性は、翌年の断食月には、他の人に先立って断食を開始し、その日数分をうめた。

また、宇宙飛行士のイスラム教徒（マレーシア人）の宇宙滞在時期に断食月がかかり、その間の断食方法についてマレーシア側でガイドラインが示されたと報じられたこともある。

### 断食月とファーストフード店

イスラム教徒が多数派のジャワでは、断食月中は多くの飲食店が日中は閉まる。そのため、断食をしない人には外食がしにくい期間である。断食月中も日中に営業しているのは、外資系のハンバーガー、ピザ、ドーナツの店、デパートのフードコート等である。外資系のファーストフード店は、ガラス張りで店内が良く見えるようになっていて、断食月中はガラスの部分に目隠しのカーテンが張られ、飲食をしている姿が見えないようにされる。断食月に限って、女性店員がイスラム教徒のベールを着用する店もある。店のマークの入った一ヶ月分の断食

表が無料配布されるなど、断食月に配慮しているという態度を示すと同時に、「一日の断食明けには、ぜひ配達注文のお電話を」という広告もすっかりと印刷されている。

二〇〇八年九月にインドネシアを訪れた際、六年ぶりに断食月にあたった。近くの街に出かけた帰り道、空腹をおぼえて立ち寄ったのは、やはり外資系のドーナツ店だった。店内の席には西洋人のカップル、インドネシア人らしい男性が一人いるだけだった。この男性はイスラム教徒ではないのだろうか、自分も断食をしていないのに、つい断食をしない人の存在が気になってしまう。また、断食中と思われる店員たちの前で飲食をするのを申し訳なく思う。ベールをつけた女性も何人か入店してきたが、みなドーナツの入った箱を手に店外へと出て行く。この店のドーナツは他店より高価であるため、断食明け用のちよつとした贅沢なのだろう。

### 断食月中の楽しみ

ところで、ジャワでは、家族であっても一緒に食事をするとということが重視されない。料理は食卓に並べられてあり、家族がそれぞれ食事をし、一家そろって食事をするとすることは稀である。一緒に食べる場合も、食べながら話をすることは



■イスラム教徒の女性が着用する礼拝着。手に持っているのは、礼拝用の絨毯。



■断食月中のショッピング。

少なく、食事時間はかなり短い。食事の場ではなく、居間に集まり、テレビを見ながらおしゃべりをするなどして、コミュニケーションをとる。しかし、断食月中に限っては、食事時間が同じになるため、同じ時間に一緒に食事をとる。

断食月中はブカ・ブルサマ、文字通りには「一緒に（断食を）明ける」という会がモスク、レストラン、ホテル、家庭など様々な場で行われ、親戚、友人、隣人、職場の同僚と様々な単位で催される。この会はパーティーのような楽しみの場で、普段よりも豪華な料理を口にする。共に食事することを重視しないジャワ人でも、断食月中にはこの会を催し、参

加する。

また、断食月中は、モスクで晩の集団礼拝、宗教講話会やコーラン読誦会が行なわれるなど、宗教的な活動が活発化する。こうした会に参加するため、特に女性にはベールやイスラム服を新しく買ったリ、礼拝着を新調したりする。また、断食明けの大祭用の晴れ着を準備するため、断食月中は布地を扱う店、洋服屋、デパートが混雑する。これは断食中の気晴らしの意味もあり、ウインドーショッピングをすることで、空腹をまぎらわすのだと話す人もいた。

### 断食月明けの大祭

断食月明けの大祭イドゥル・フィトリを心待ちに、人々は一ヶ月の断食を続ける。断食月明けはイスラム教徒にとって、日本の盆や正月のようなもので、学校や仕事が休みとなり、故郷で断食月明けを過ごすための交通機関の混雑、渋滞がおこる。

大祭が近づくと、日頃お世話になってる人には、果物、菓子や食品の籠盛り、服を作るための布地、断食月明けを祝うカードなどが贈られる。大祭に訪れてくる親戚や隣人をもてなすための菓子や料理の準備が始まり、物価もそれにあわせて上昇する。

断食月明けの前夜には、モスクや地域単位で子どもや若者が「アッラーは偉大なり」と言いながら松明を持って近隣を歩き回るタクビランを行なう。いくつも

のグループが参加するため、通りはぎやかである。

断食月明け当日の朝は、モスクや広場で集団礼拝が行われ、それに続いて宗教講話がなされる。これが終わると家に戻って朝食をとり、近所や親戚の家へ挨拶まわりに向かう。近所での訪問先は年長者がいる家、モスクや村役人の家などいわゆる地域の中心人物の家が中心となり、こうした家では挨拶をするための列ができる。訪問した側は訪問先の家族の手を取って、日頃の過ちに対して許しを請う台詞を言い、相手はお互い様と答えた上で勉強や仕事が順調であるように、早く良縁に恵まれるように等の言葉をかける。菓子や飲み物が出され、子どもには小遣いが渡される。このように、断食

月は苦しいだけのものではなく、楽しみ要素も散りばめられており、断食月明けの大祭はその頂点となる。

ここではインドネシアを中心に記述したが、イスラムや断食月は必ずしも遠い世界の事ではない。就学・研修等で日本に住むイスラム教徒は増加しており、日本でも日常の場でイスラムと接する機会は今後増えていくことと思われる。

### 参考文献

大塚和夫（他編）『岩波イスラム辞典』岩波書店、二〇〇二年。  
桜井啓子『日本のムスリム社会』筑摩書房、二〇〇三年。



■（上段）断食月明けの近所への挨拶まわり。年長者の手を取り、日頃の過ちを詫げる。（中段）断食月中に贈られる籠盛りの一例。（下段）断食月明け前夜に近所を回るタクビランに参加する子ども。





■福富地区の権伝馬船の前でホーランエンヤについて熱く語るダスティンさん。

# ダスティン・キッドと行く！ ミニ神社巡り



鈴木綾菜

私たち日本人には、日本に住んでいて当たり前存在になつてしまっているものが少なからずあるだろう。しかし、それは異国の人にとっては珍しく見えることがある。例えば、神様を祭るために日本のいたる所に建てられている神社。お正月にお参りしたり、そこで結婚式をしたりと、身近に感じるができる。そんな神社の魅力に惹かれたのがダスティンさんだ。

本名はダスティン・ジョン・キッド。最初に島根に来てから十一年が経つ。彼に神社について語らせたら、一日があつという間に過ぎてしまうだろう。今回はインタビューと神社巡りの旅を通して、彼のまっすぐな生き方を見ていくことにしよう。



■十二所神社で記念写真。笑顔がすてきなダスティンさん。



■多賀神社の看板に頭をかかえているダスティンさん。

私はこれまで一度も彼の名前を聞いたことがなかったが、島根ではちょっとした有名な人らしい。日本語で本も出していると聞いたので、さっそく図書館に行ってみた。『お〜い、元氣か!?』という何とも変わった題名で、表紙に載っている彼の写真からはその陽気さがうかがえた。本には日本に来て体験したこと、感じたことが素直に書かれていて、とてもおもしろく、考えさせられることもあった。本を読み終えた時には、早く彼に会ってみたいという気持ちでいっぱいだった。

### 感動の初対面

いよいよその時がやってきた。六月

二十五日、彼の勤務校の開星高校を訪れた。応接室に通され待つこと数分。「こんにちは〜」。入ってきたのは、そう、ダスティン・キッドさんだ。スキンヘッドで口元に茶色の髭を生やしていて、にこっと笑った顔が本とそっくりだ。「今日はよろしくお願いします」と頭を下げ名刺を渡された。思っていたよりもかしまった人なのかと感じたが、すぐにそれは違うことがわかった。彼は本当に明るく楽しい人で、限られた時間の中、いろんなお話を聞かせてくださった。

ダスティンさんは一九七七年、アメリカのアイダホ州で生まれた。アイダホ州といえば何で有名かご存じだろうか？実はジャガイモで有名なのだ。日本のスーパーで売られているジャガイモと違い、アイダホ産はとて大きい。最初に日本でジャガイモを見たときはその小ささに相当驚いたそうだ。「何だよ、一口かよ!」。彼に言わせれば日本のジャガイモはジャガイモじゃないらしい。自己紹介からいつの間にかジャガイモの話で盛り上がりすぎてしまい、「あ、自己紹介の途中だったなっ」(笑)と、やっと本題に戻った。

小学二年から大学までワシントン州に在住。大学はセントラルワシントン大学に通い、二年生の時、日本からの留学生と友達になったのがきっかけで日本語を勉強し始めた。元々外国語に興味があったのだが、日本語に出会って直感的に「これだ!」と感じ、さらに専門的に勉強を



した。そして九八年の秋から一年間、島根大学に留学。これがダスティンさんと島根の長い関係の始まりだった。アメリカに戻って卒業した後、再び島根へ。途中北海道にも住み、現在は開星高校で英語の教師をしている。

それにしても本当に日本語がお上手だ。たまに彼の口から出てくるきれいな英語の発音がないと、日本人ではないことを忘れてしまうほどだ。アメリカに住む両親に電話する時でさえ、思わず日本語が出てきてしまうそうだ。一年のほとんどを故郷に帰らず日本で過ごすダスティンさん。そんな彼を両親はどう思っているのか？長男でもある彼に父の会社を継いでほしい気持ちや、もつとそばにいてほしいという思いもあるのが正直なところ。しかし、自分の好きなことをやっている息子を応援してあげたいと、あたたかく見守ってくれているそうだ。

### カルチャーショック!

今ではすっかり日本にとけこんでいるダスティンさんだが、初めはやはり戸惑うことも多かったみたいだ。日本に来て初めて体験したカルチャーショックについて尋ねると、意外な答えが返ってきた。

それは、新宿の夜。どこを見ても周りには人、人、人!! それまで人の少ない田舎で育った彼にとっては、この人の波がとにかく恐ろしかったのだ。「えっ、え!? どつからこんな人が出てくるの!?!」と、あまりの人の多さに腰が抜けそうになり、女友達に手をつないでもらったそうだ。「この手を離したら人波に飲まれてしまう!」と本気で泣きそうになったという。時がたつた今でも、このカルチャーショックは忘れられないらしく、興奮しながら私たちにその時の自分の様子を熱演してくれた。

他にも和式トイレの使い方に苦労したそうだ。どつちが前でどつちが後ろなのかかわからない。「人にやって見せてって頼むわけにもいかないし」と苦笑い。留学中は洋式トイレマップを作って、なるべく和式トイレは避けていた。

### 日本食と日本の女性

一般に日本食は素材の味を大事にしていると言われている。これまでダスティンさんはさまざまな日本食を食べてきている。北海道に住んでいた時は室蘭のカレーラーメン、白老の和牛、札幌の味噌ラーメンなどなど。思わずよだれがでて



きそうだ。「今の体型の原因かな」と笑いながら、「北海道の食べ物はずべておいしい！」と絶賛。そばも好きな日本食のひとつで、「そば巡り」をするほどだ。

独特の匂いと

ねばねばした食感で日本人でも苦手な人の多い納豆は、意外なことに嫌いではない。回転寿司に行った時は、周りの日本人の反応を楽しむために、わざわざ納豆巻きを食べるというからおもしろい。彼の両親も日本食のファンで、たまに日本の食べ物を送ってあげるのだという。アメリカの料理は味が濃いうえ、カロリーも高く、その量の多さもすごいということとよく知られている。たった二週間帰国しただけであつという間に体重が増えってしまったそう。

インタビューの中で彼がたじたじだったのが「日本の女性は好きですか？」という質問だ。こんな質問をされるとは思ってもいなかったのだろう。大爆笑しながら頭のとっぺんまで赤くなり、「いい質問だ！」と言ったあと「はい」と答えてくれた。女性に限らず、日本人は最初壁があり表面的な付き合いが多いとよく言われるが、一度その壁を乗り越える

と、とてもいい付き合いができるのだという。ユーモアがあつて、一緒に笑ったり、時には真面目な話もしたり、そんな人が特に好きなのだという。「笑えなくなったらさみしいじゃん」と私たちにこつと白い歯を見せた。

### 「巡り」が大好き

彼はいろんな「巡り」をしている。なかでも彼の一番の自慢は「一の宮巡り」だ。「一の宮」とは各地域の中で一番の神社のことで、昔ながらの文化が集中している場所でもあるのだ。実はダスティンさんは全国一〇六の「一の宮」をすべて参拝したというすごい人なのである。そこへ実際に足を運ぶことで、その文化を感覚的に感じとることができるといふ。一〇六もの神社をすべて参拝するということは、そう簡単にはできるものではない。「いろいろな人の支えがあつた



■多賀神社。石段の上からの景色は最高です。

からこそできたことで、自分一人の力ではできなかった」と振り返る。参拝した神社では朱印をもらうそう。その朱印を押してもらったための朱印帳を見せてくれた。この一つ一つにきつといるんな思ひ出があるのだろう。

神社巡りをするうちに気持ちに少しずつ変化があつたという。最初のころは神社を訪れてはお願い事ばかりをしていたが、神様にしつこいと思われてるんじゃないか、もしかしたら逆に迷惑かもしれないという気持ちにかられるようになった。それからは神社巡りができて、ただその場にいられることに感謝するようになったそう。

松江に住んで長い彼に、松江で好きな場所を教えてくださいました。一つめは川に映る光の反射がとてもきれいな夜の天神川。二つめは木漏れ日が神秘的な神魂神社。三つめは夕日が独特の美しさを見せる多賀神社。ここには今回ダスティンさんと訪れることができた。時間があるときにみなさんもぜひ足を運んでほしい。

今年、松江では十二年に一度の一大行事、ホーランエンヤが行われた。この祭りでは五つの地区から船がでる。この船に乗る人たちがそれぞれの地区にある神社に奉納するのが、多賀神社はそのうちのひとつだ。ホーランエンヤは一度見逃すと次は十二年後。実は前回行われたのが、彼が留学で島根に来た年のちょうど一年前だったのだ。いつかまた島根に来る機会があつたらぜひ見てみたいと思っ



■朱印帳。この日も神社に行って朱印をもらってきたそうです。

ていただけに、この祭りに対してとても熱い思いを持っていた。

### ホーランエンヤを巡る

六月二十八日、少し早目に集合場所に着き待っていると、青い車がこちらに向かって来た。中から出てきたのは虎柄のシャツをはおって、青い帽子をかぶり、白い足が一際目立つ黒い短パンをはいたダスティンさん。今からハワイにでも行けそう。休みの日くらいは堅苦しい服装から解放されたいんだ。ネクタイなんかしてくるか!!と日頃の鬱憤をやらせてうれしそう。私たちの前を通り過ぎる生徒に「Hello! こんにちは」と手を振り、生徒も「Hello! ダスティン」



■十二所神社。まだまだ元気なダスティンさん。

とそれに応えていた。生徒との距離も近く、とても慕われているようだ。

全員そろったところで、いよいよ彼の愛車「ハロー号」に乗って出発した。車の後ろには「デブでヒゲはえてたらダメなのかよ」と書かれたステッカーが貼ってあったが、それについては何も聞かなかった。

最初の目的地は多賀神社。細い道のわきに鳥居があり、その先は大橋川が流れている。道の反対側には急な石段があり、そこを上がると多賀神社で、さっきまでの蒸し暑い空気が一気に涼しい空気に変わる。上から見渡す景色がきれいだった。夕暮れ時の眺めはもつとすごいのだという。本堂の屋根にはお面がついていて、その説明もしてくれた。ここには五、六回来ていて、聞きたいこともたくさんあるらしいが、いつ来ても宮司さんがいなくて聞けずにいるようだ。

次の目的地に進むにつれ道が細くなってきた。「前ここを通ったとき、溝に落ちたんだよね」と笑いながら運転する彼



に、笑い返しながら少し不安になった。

途中、ホーランエンヤで使われた福富地区の権伝馬船がある場所に連れて行ってくれた。以前たまたま見つけて、カメラを取りに急いで戻ったそう。他の船も同じように、見つけては近くの人に頼んで写真を撮らせてもらったり、特別に船に乗せてもらったりしたとうれしそうに話してくれた。

大井神社は周りを大きな木に囲まれていて、神聖な雰囲気か漂っていた。「このにおいが好きなんですよ」と彼が言うように、空気が澄んでいてとても落ち着ける場所だった。説明に難しいことばがつきづき出てきて、みんな苦笑い。

神社に一礼して次の目的地に向かった。

### とことん精神

神社に関わることばの中には日本人でも知らないことばがたくさんある。いったいどうやって覚えていったのかと尋ねると、最初はやはり何のことだかチンプンカンプンだったという。神社に置いてある資料を持って帰って勉強したり、神主さんと話しているときに聞いたり、繰り返しで少しずつ覚えていったそう。興味があったらとことん追求するこの精神、私もぜひ見習いたい。

中海が見えてきた。車を駐車スペースに留め、神社まで少し歩いた。ダスティンさんは途中すれ違った人に、必ず「こんにちは」とあいさつをする。目的地の十二所神社に到着。本殿の屋根の下には、龍や虎、兎、獅子などの見事な彫刻がある。ダスティンさんが兎の数え方を知っていたことにはビックリした。彼のお気に入りには手水舎のカエルの置物。見ているだけで和むことができた。

最後に大海崎地区の権伝馬船を見に行った。十二所神社はこの地区の神社。船の前でダスティンさん流決めポーズで記念写真を撮り、今回のミニ神社巡りは終了した。今回の旅で彼がどんなに神社が好きなのかがとてもよくわかった。

「神社をまわると落ち着くんだよ。きれいな空気で神聖な場所だから、精神的にも洗われるしね」。彼にとつて神社とは「安らぎ」そのもので、何かにつまず



いた時にその物事を一歩下がって見ることができ場所なのである。

彼は常に何か楽しみを見つけて毎日を通じている。西国巡りに坂東巡り、八十八カ所巡り、これからやりたいことがまだまだたくさんあるようだ。

「ただ同じことをくりかえす毎日なんてつまらない。人生一度だけなんだから、やりたいことを見つけてそれをしようじゃないか!」。私はダスティンさんと出会って、こう思えるようになった。彼の旅はこれからもまだまだ続くだろう。(すずき・あやな／英語文化系二年生)